

発刊に寄せて 平井 聖 4

はじめに

——わが国初の世界文化遺産・国宝「姫路城」の魅力 中元孝迪 6

第I章 世界文化遺産 姫路城公式ガイド

世界文化遺産登録エリア

中曲輪 12

内曲輪 14

姫路城入城口内マップ 18

城内探訪

入口エリア 20

西の丸に行く 22

二の丸に行く 27

大天守に行く 38

小天守と渡槽 44

備前丸に行く 48

上山里曲輪に行く 52

搦手に行く 58

第II章 城と町のすがた

江戸時代の城と町

絵図に見る城と町 64

発掘された城下町 68

城下散策ガイドマップ 72

城下を歩こう

1 姫路駅から大手門 —— 「外曲輪」をたずねて 74

2 堀と城門跡 —— 「縄張」を体感する 78

3 野里 —— 職人の町、街道が通る交通の要所 83

4 船場・城西 —— 西国街道と水運で栄えた町 86

5 寺町 —— 池田輝政がつくった町 88

第III章 城と人の歴史

姫路城の歴史

姫山の城 92



秀吉の築城 93

「播磨宰相」池田輝政と池田氏 94

城下町の建設 100

本多忠政の整備 102

城と石垣の普請 104

歴代城主 —— 江戸期通じ全国最多の城主 特異なポスト 105

酒井忠績と姫路藩の幕末・維新 108

修理から見た姫路城 110

幾多の危機を乗り越えた美しい不死鳥 114

姫路城ゆかりの人物

黒田官兵衛 —— 軍師から進化、天下を狙って… 115

羽柴（豊臣）秀吉 —— 姫路城から「天下」へ飛躍 116

池田輝政 —— 家康の女婿、「西国将軍」とも 117

榊原政岑 —— 太夫身請けした「風流大名」 119

松平明矩 —— 失政で一揆招いた「名門城主」 119

酒井忠以 —— 一級の茶人大名、抱一の実兄 120

姫路城略年表 121

姫路城の一年 122

姫路城下町の祭礼 124

コラム

千姫 26 / 狭間と石落とし 30 / 石垣 31 / 転用石 36

後期望楼型 42 / 連立式天守 43 / 大通し柱構法 47 / 扇の勾配 51

お菊井戸と皿屋敷 54 / 縄張 56 / 殿様の見回りコース 60

姫山樹林 61 / 天守の妖怪と宮本武蔵 77 / 輝政と八天塔 118

おわりに 志賀咲穂 126

- ◎姫路城に関する表記は概ね『姫路市史』に従っていますが、その限りでない場合もあります。
- ◎内曲輪の固有範囲を示す明治以前の名称としては、本丸、二丸、三丸などがあり、表記も「○ノ丸」「○之丸」などとされてきましたが、必ずしも範囲が明確にわかるものではなく、本書では便宜的に『姫路市史』等で示された曲輪名を用いています。
- ◎「内堀」「中堀」「外堀」などの表記は原則として「堀」を用いていますが、「外濠公園」などの固有名称については、それに従っています。
- ◎門の名称の表記は、平成23年発行『特別史跡姫路城跡 整備基本計画』に従っています。
- ◎年号は、原則、西暦（元号）と表記しています。
- ◎諸説ある事項について、一般的と思われる内容で記述していますが、他説を否定するものではありません。



発刊に寄せて

東京工業大学名誉教授 平井 聖

姫路城は、天守を現存する数少ない城の一つである。明治維新を迎えて、城は無用となり、城郭の多くは取り壊された。残った城も、第2次世界大戦の折に、アメリカ軍の空襲によって多くが焼失した。さらに敗戦後、松前城天守（北海道）が城下からの火に延焼し焼失、その結果、江戸時代以来の天守は、12基を残すだけとなった。

江戸幕府は、慶長20年（1615）、諸大名に対して領国一国に居城一城とすることを定め（所謂一国一城令）、金沢藩や仙台藩のようにいくつかの許された例外はあるものの、それ以外の城を破却することを命じている。残された居城についても、石垣、建物の修復には、幕府の許可を得なければならなかった。天守を失った場合でも、天守の再建はほとんど許されず、天守にかわる三階櫓の建設が許されることが多かった。この一国一城令後に建てられた天守に相当する櫓は、6基である。それらの内で、小天守に相当する櫓を従えているのは松山城（愛媛県）だけで、そのほかの弘前城（青森県）、備中松山城（岡山県）、丸亀城（香川県）、高知城（高知県）、宇和島城（愛媛県）は、いずれも単独で建つ櫓である。（これらの櫓は、現在はいずれも天守と呼びならわされている。）

一方、現存する一国一城令の前に建てられた天守は6基で、北から丸岡城天守（福井県）、松本城天守（長野県）、犬山城天守（愛知県）、彦根城天守（滋賀県）、姫路城天守（兵庫県）、松江城天守（島根県）である。

これらの天守のうち、丸岡城天守（天正4年[1576]）は2重3階の独立した天守であるが、松江城天守（慶長16年[1611]）は4重5階で、入口に付櫓を設け、犬山城天守（慶長6年[1601] 元和6年[1620] 改造）は3重4階で、入口脇他に付櫓を設けている。彦根城天守（慶長11年[1606]）は3重3階で、2か所



丸岡城天守 松本城天守 犬山城天守 彦根城天守 姫路城天守 松江城天守

に入口の付櫓と多間櫓を設けている。さらに複雑な構成を見せるのは松本城天守と姫路城天守で、松本城天守は現在5重6階の天守（文禄末年[1596頃]）と渡櫓でつながる3重4階の乾小天守（文禄元年[1592]）、天守に接する2重2階の辰巳付櫓（寛永期[1624-43]）、辰巳付櫓の先にある1重の月見櫓（寛永期[1624-43]）から構成されている。姫路城天守は大天守と三基の小天守（古くは東小天守はうしとら櫓、乾小天守はいぬい櫓、西小天守はひつじさる櫓と呼ばれていた）（いずれも慶長14年[1609]）を二重の渡櫓で口の字型に繋いだ最も複雑な形式で、姫路城天守において最も守りのかたい型が出来上がった。

また、現存するこれら6基の天守の中で、白亜の天守は姫路城だけである。そのほかの天守は、いずれも腰壁を下見板張りとしている。一国一城令以後の現存天守や、城内の隅櫓や塀などの多くが板壁のない白亜の姿であるために、城の建物は青空に映える白亜のイメージが強いが、一国一城令以前に建てられた6基の天守の中で、下見板の腰張りの無い、すべてが白漆喰塗込めの白亜の天守は、姫路城天守だけなのである。現存しない一国一城令以前の天守の中には、白亜の天守も存在するので、姫路城天守が白亜の天守の最初の例とは言えないが、4基の大小天守を繋ぐ渡櫓をも含めて、白亜の大小天守4基が並び建つ姫路城天守こそ、世界文化遺産に登録される価値のある、日本の城の最も美しい姿なのである。

このたび、はじめて世界文化遺産姫路城の公式のガイドブックが、姫路市によって編纂されることになった。公式ガイドブックの編纂ははじめてなので、公式ガイドブックが何を以て公式たり得るか、十分に検討されたかは心もとないというのが、偽らざる反省である。現状において、姫路城に関する知りうることを網羅したこのガイドブックが、城内を歩くための人々のガイドたりえたか。今後、実際に使って下さった多くの方々から御意見をいただいて、次の版においてより良いガイドブックを作ることをお約束したいと思う。



弘前城天守 備中松山城天守 丸亀城天守 松山城天守 宇和島城天守 高知城天守

はじめに——わが国初の世界文化遺産・国宝「姫路城」の魅力

兵庫県立大学特任教授、播磨学研究所所長 中元 孝迪

400年前の姿を今に

姫路城は、播磨地方の中心都市、姫路市に建つ近世城郭である。1601（慶長6）年から足掛け9年の歳月をかけ建てられ、木と土と石で築かれた400余年前の姿を今にとどめている。日本で初めて世界文化遺産に登録され、江戸以降の天守が現存する国宝五城の中で最も早く国宝に指定されるなど、日本はもとより世界を代表する城である。

播磨は古来、わが国有数の米作地帯が広がる経済大国であると同時に、いわゆる「西国」の東端、畿内の入り口に位置し、歴史上最も重要な政治・軍事的要衝とされてきた。そのため、城主の政治力だけでなく、城の構造、美観等建築全般にわたって特別な配慮がなされている。「比類ない」と形容される豪壮、優美な姿は、こうした背景のもとに出来上がり、これが世界文化遺産としての価値を決定づけている。

本書は、「公式ガイドブック」として初めて編集されるのだが、はじめに世界遺産の価値、美観の状況、大まかな歴史など、姫路城の持つ特別な側面について概観し、その特異なイメージを浮き彫りにし、姫路城全体の魅力について紹介する。

1 「世界文化遺産」としての価値

「世界遺産」とは、ユネスコ（国連教育科学文化機構）の「世界の文化遺産及び自然遺産の保護に関する条約」（世界遺産条約）に基づいて「世界遺産リスト」に登録された文化、自然、複合遺産を指す。登録基準は「人類が共有すべき顕著な普遍的価値を持つもの」とされ、具体的には①人類の創造的才能を表現する傑作②ある時期ある文化圏において建築、技術、記念碑的芸術、都市計画、景観デザインの発展に関し、人類の価値の重要な交流を示すもの③人類の歴史上重要な時代を例証する建築様式、建築物群、技術の集積または景観の優れた例——などと細かく定められている。

姫路城は、1993年12月11日、わが国第一号の世界文化遺産として登録された。適用基準は①の「人類の創造的傑作」と、②の「ある時期における文化の稀な証拠」である。①に関しては「美的完成度が我が国の木造建築の最高の位置に

あり、世界的にも類のない優れたもの」、②については「17世紀初頭、日本の城郭建築の最盛期に造られた天守群を中心に櫓、門、土塀等の建築物や石垣、堀などの土木建築物が良好に保存され、防御に工夫した日本独自の城郭の構造を最もよく示している」と評価された。

この2点が、姫路城の世界文化遺産としての価値であり、これに基づき、池田輝政の天守群を中心にその後の城主によって拡充された城域中心部の構成資産（コアゾーン）107ha、周辺の緩衝地帯（バッファゾーン）143haが遺産区域として登録されている。

2 「比類なき美」の要素

元来、戦闘施設である城郭が、一般的に美の対象として見られるようになったのは、江戸時代後期以降と考えられる。各種道中記には、城の記述が登場し、なかで「姫路城は日本一」といった賛辞も散見される。このころから、姫路城の傑出した美についての認識が徐々に広がっていったと思われる。

一方、城（藩）主は、城郭美についてどう考えていただろうか。江戸期の軍学者が指摘する「天守の10の用途」——いわゆる「天守十徳」の中に、「遠方を見る」などと並んで「一城之飾^{いちじょうのかざり}」というのがある。天守は城を美しく見せる「飾り」でもあるとの見解が示されていることから、城郭美について特別の意を用いた築城主のいたことが分かる。姫路城の築城主である池田輝政は、そんな「美」について最も強くこだわった城主であるといっている。その輝政の築城意図が、江戸期を通じて人々の間に浸透し、姫路城の美しさを広く定着させていったのだろう。明治に入り、姫路城は「経営の精巧さ」を理由に保存、修理が決定される。「経営の精巧さ」とは「素晴らしい設計による美しい城」ということだ。廃城の危機の中、姫路城は、美しさゆえに日本を代表する城として、近代によみがえったのである。

それでは、輝政は「美」を演出するため、外観にどんな工夫を凝らしたのか。その結果、姫路城のどこが、どう美しく見えるのか。以下、主な5つの観点から「美の要素」について見てみよう。

① 白色の美。意外にも、白い城は極めて珍しいのだが、その中でも姫路城は、壁は無論のこと屋根瓦の目地まで白漆喰で塗り固められ、より白く輝いて見える。平安貴族が「いとなまめかし」と表現した白色は、すべての色を超越した美しさを持っており、古来、日本人の心を捉えてきた。平成の修理を終えた真っ白な天守に内外の観光客が感嘆の声を上げたのは、そのためである。

② 連立天守の美。姫路城天守は、和歌山城、伊予松山城と並び、いわゆる「連立天守方式」の代表例である。連立天守というのは、おおむね「口」の字型天守台の角に大天守、小天守、櫓を配し、それぞれを廊下で結んだ平面構造を指す。櫓が連なっているということから名づけられたのだが、姫路城の場合は、「口」の字型天守台が極めて狭いため、大天守、小天守が重なって見え、あたかも高層のツインビル、トリプルビルが林立しているような外観を呈している。このような立体的連立天守群は姫路独特のものである。重層・ダイナミックなスカイラインが形成され、圧倒的で、荘厳な美しさを見せているのである。

③ 異例のスマートさ。姫路城大天守の特徴として、まれにみるスマートさを挙げることができる。例えば、床面積および外観各層の高さを見てみると、上部に行くほど狭く、高くなっている。ことに最上階(外観5層部、内部6階部)は面積、高さが、それぞれ極端に狭く、高くなっていることが分かる。そのことが、「すくくと立つ」というイメージを作り上げ、他城とは趣を異にする天守となっている。

④ 優雅な屋根のライン。例えば、大天守の正面から屋根のラインを見てみよう。1層部分は横にまっすぐ伸びる平屋根。上の2層部分は真ん中に優雅なカーブを描く唐破風。3層部は二つの千鳥破風が左右に並び、その間に4層部の千鳥破風。最上階には再び唐破風がやさしく乗っている。直線、曲線、斜線を織り交ぜた屋根のラインが、姫路城独特の絶妙のリズムを刻んでいる。

⑤ 独特の構造美。狭い天守台に施された連立天守だけに、櫓、屋根、壁、石垣、門といった構造物が、濃密に重なり合うように配され、他の城にはない美しい重層的空間を各所に作り出している。

池田輝政は、こうした美的観点に留意しながら築城に当たったと思われる。1600(慶長5)年の関ヶ原合戦を経て、「戦国」から「偃武」(武器を偃せて用いない)の時代を迎えることになる。時代の転換点に際し輝政は、「武=ハードの統治」から「文=ソフトの統治」へと政治姿勢を180度転換させ、「文」あるいは「美」「知」といった概念を、統治の根幹に置いた。そのため、統治のシンボルとして美しい城郭にこだわり、その結果、比類なき美しさを誇る城郭が完成するのである。

3 異例で最多の城主群像

古来、政権を揺るがす多くの軍事行動が、「西国」の首根っこでもある播磨及び播磨・摂津国境付近で展開されていることは周知の事実である。この地をだれに治めさせるかによって、政権の命運も決まる。そのため、姫路城には、史上の画期を刻む多くの有力人物が配され、他に例のないほど重厚・多彩な城

主が顔をそろえている。黒田官兵衛、羽柴秀吉をはじめ、羽柴秀長、木下家定、さらに江戸時代に入り「西国将軍」として徳川家康の娘婿・池田輝政が入封し今の姫路城を建造する。その後も、家康の四天王につながる本多、榊原、酒井、これに結城松平という名門が、「西国の押さえ」「西国探題」として二度、三度と姫路入りする。異例の城といえる。

さらに姫路では「若年城主は不可」という`特異な不文律`ができあがる。要衝・姫路の城主として戦闘指揮のできないものは不適とされ、後継城主が幼、少年であれば、有無を言わず他所へ転出させられたのだ。他の城には見られない特異な処遇で、若年城主の強制転封は、実に8人にも及ぶ。

こうしたこともあって、姫路城主の数は日本最多を記録している。関ヶ原時点から幕末までの267年間続いた全国各地の城(藩)において、交代した城主(藩主)の人数は、筆者の調査によると、平均16.01人で、将軍の数とほぼ符合する。これに対し姫路の場合は実に33人を数える。異常な多さで、城主が入れ代わり立ち代わり就封している様子がはっきりとわかる。政権防衛のため若年城主を即時交代させたこと、酒井氏のように、ステイタスや財政上の観点から豊かな姫路を所望する大名が多くいたことなどが、特異な城主群像の背景にある。

4 姫路城の起源について

姫路城の起源をいつにするかについては、諸説ある。大まかに分けると通説の「赤松説」と、新説の「黒田説」がある。前者は1333(元弘3)年、播磨の豪族赤松則村(円心)が鎌倉幕府打倒の兵を挙げ、西播磨の苔縄から京に向け進軍を開始した際、姫路に着目し「砦」を築き、その後の1346(正平元)年(1349年説も)、則村の二男・貞範が、今の姫路城のある姫山に築城したというもので、赤松貞範を初代城主とする。同山上にあった称名寺の板碑の碑文や伝承などがもとなっている。

これに対し、同じ正明寺(称名寺)に残る土地売券をもとに、1555(天文24)年時点では山上に城はなく、6年後の1561(永禄4)年になって「構」の存在が確認できることから、姫山での初めての城は、この6年間に建造されたとする説である。この時の姫路の支配者は、黒田氏の系譜からすると重隆となり、黒田重隆を初代とする。

土地売券は、相当な説得力があり、黒田説が有力ではあるが、山上以外の「城」の存在の可能性もあることから、なお通説を全面否定するまでには至っておらず、起源論争に完全決着はついていない。